

学生のレポートにおける話し言葉とその出現傾向

山下 由美子

要 旨

学生のレポートにおける話し言葉の出現傾向を探るため、レポートの書き方に関する書籍で扱われる話し言葉を一覧表にまとめ、「学術文章作法Ⅰ」で課したレポートから出現数を調査した。最も多く出現したのは、接続表現の「そして」である。理由として、それを話し言葉と断定し、対応する書き言葉を明確に示しにくいことから、学生達は書き言葉であると認識し使用していると思われる。「じゃあ」「超」「～ちゃった」など口語としての話し言葉は全く出現していないため、ある程度は話し言葉と書き言葉の区別は身につけていると言える。また、「ほとんど」「～と～」等、話し言葉と書き言葉の境界線があいまいなものも調査から明らかとなった。

キーワード：初年次 レポート 話し言葉 書き言葉 学術表現

1. はじめに

年々多くの大学で、初年次向けにレポート・論文の書き方等文章作法関連の授業が開設されるようになり、日本人学生に対する日本語教育、文章力育成の向上が図られている。文章作法に関する授業では、レポートの書き方の中でも構成面や形式面が重視される傾向がある。一方、特に専門科目でのレポート課題においては、内容面が重視されることがあるが、そうであったとしても、文章表現に問題があれば、読み手にとっては内容理解の負担となり、それが評価にも影響を及ぼしうる。つまり、レポート作成において「学術文章に適した文章表現（以下、学術表現）」は、いかなる分野にあっても基本的に求められるものである。

しかし、主語と述語の対応が不適切、助詞の使い方の誤り、学術表現と話し言葉の区別がつけられないといった事例は、初年次に限らず多くの学生のレポート

に見られており（佐藤 2002:69）、レポートの形式や内容以前に日本語の運用そのものに問題を抱えていることが明らかとなっている。特に、話し言葉についてはその境界線は不明確な部分も多く（石黒 2011:16）、教員によっても解釈が異なるため、一貫した指導がしにくいとされている。

学術表現を使いこなすには、日頃から意識的に学術文章に触れるなどの能動的な努力が必要であることは言うまでもないが、学生たちはレポート作成段階で、話し言葉や文体に関する注意、さまざまなレポートの見本などから、ある程度の話し言葉と書き言葉（学術表現）の区別は認識し、執筆段階においてもそれを意識しながら執筆しているはずである。にもかかわらず、学生のレポートには話し言葉が頻出する傾向がある。

そこで本稿では、まず「レポートの書き方」関連書籍で扱われる話し言葉を抽出し、どのような言葉が話し言葉として取り上げられているかを探る。次に、それらの話し言葉を、学術表現を意識しながら書かれたであろう本学の「学術文章作法Ⅰ」で提出された初年次学生のレポートを用い、レポートに出現する話し言葉の傾向を明らかにする。そこから、習得されにくい、または意識されにくい話し言葉がどのようなものであるかを考察する。

2. 「レポートの書き方」関連書籍における話し言葉の扱い

大学生向けのレポートの書き方を紹介する関連書籍（以下、関連書籍）は、現在、数多く刊行されており、その中で話し言葉の使用について注意を促しているものも多く見られる。しかし、扱われる話し言葉の種類や量、どの書き言葉に改めるべきかについての例提示の仕方等、書籍によって大きく異なっている。本章では、関連書籍に番号を割り当て、各書籍の中で扱われる話し言葉を一覧表にまとめる（表1）。また、表2¹⁾は話し言葉（または、くだけた表現）に対する書き言葉（または、レポートに適した表現）が、それぞれどの関連書籍で扱われているかを、各書籍に割り当てた番号で示したものである。なお、番号なしは、関連書籍には提示されていないが、学術表現として不適切と判断したものを取り上げた。

表1 「レポートの書き方」関連書籍一覧

番号	関連書籍名
①	創価大学学士課程教育機構（2017）『レポート作成の手引き 2017 年度版』
②	秋岡伸彦（2007）『文章表現テキスト』東京農業大学出版会

③	石黒圭（2012）『この1冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』日本実業出版社
④	石坂春秋（2003）『レポート・論文・プレゼン スキルズ』くろしお出版
⑤	井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法〔第2版〕』慶應義塾大学出版会
⑥	上戸理恵・遠藤郁子・神田由美子・羽矢みずき・藤田和美・与那覇恵子（2016）『新編 マスター日本語表現』暁印書館
⑦	大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂（2014）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現〔第2版〕』ひつじ書房
⑧	石井一成著（2011）『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社
⑨	長尾佳代子・村上昌孝（2015）『大学1年生のための日本語技法』ナカニシヤ出版
⑩	銅直信子・坂東実子（2013）『大学生のための文章表現&口頭発表練習帳』図書刊行会
⑪	森下稔・久保田英助・鴨川明子編（2010）『新版 理工系学生のための日本語表現法』東信堂
⑫	菊田千春・北林利治（2006）『大学生のための論理的に書き、プレゼンする技術』東洋経済新報社
⑬	伊藤義之（2003）『はじめてのレポート レポート作成のための55のステップ』嵯峨野書院

表2 「レポートの書き方」関連書籍における話し言葉一覧

接続表現					
話し言葉	書き言葉	関連書籍番号	話し言葉	書き言葉	関連書籍番号
でも	しかし	①③⑤⑥⑦⑧	それから	また、さらに	③⑤
だから	したがって	①③⑤⑥⑧	だって	なぜなら	③⑤
なので	したがって	①②⑥⑨⑪	じゃあ	では、それでは	③⑤⑩
なんで	なので	⑩	それで	その結果	⑤
あと	また	①②	言いかえると	すなわち、つまり	⑤
～から	～ため	①③⑩	付け加えると	なお	⑤
～ので	～ため	①	他では	一方、他方	⑤
～して	～し	①③	はじめは	まず	⑤
～しないで	～せずに	①③	そして	次に	⑤

～のに	～にもかかわ らず	①③	ずっと	より，このま ま	⑥
～けど	～が	①③⑥⑧⑩⑪ ⑫	だけど	しかし，だが	②⑤⑥⑧⑩
～したら	すれば，すると	①③⑩	～し	～で，～く	⑩
～ていて	～ており	①			
副詞表現					
話し言葉	書き言葉	関連書籍番号	話し言葉	書き言葉	関連書籍番号
もっと	より，更に	①③	ちっとも	少しも	③
多分，たぶん	おそらく	①③⑥	絶対	必ず	③
とても	大変，非常に	①⑧	超	極めて	⑩
とっても	大変，非常に	⑥	どっち	いずれ，どちら	⑥⑩
すごく	大変，非常に	①②⑧⑩	あんまり	あまり	⑥
どんどん	急速に，急激に	①	ちゃんと	慎重に，正確に	⑩
だんだん	次第に，徐々 に	①	正直	実際， 実際のところ	⑩
ちょっと	少し	①⑥⑦⑧	わりと	比較的	②
ほとんど	ほぼ	①	いまいち	いまひとつ	②
全然	全く	①③⑨	やっぱり	やはり	⑥⑧⑩⑪⑫
はっきり	明瞭に，明確に	①	だいたい	およそ，約， ほぼ	⑧
しっかり	十分に	①	もっと	さらに	⑧
きちんと	慎重に，正確に	①	なんで	なぜ	⑧⑩
まだまだ	いまだ，まだ	①	結構	かなり，比較的	⑪
一番	最も	①③	いつも	常に	
形容詞的表現					
話し言葉	書き言葉	関連書籍番号	話し言葉	書き言葉	関連書籍番号
いろいろな	様々な	①	いい	よい	①
大切な	重要な	①	こんな	こうした， このような	⑥⑧⑬
どんな	どのような	①⑧	みたい，みたく	よう	⑩⑪
たくさんの	多くの	①	すごい	すばらしい	⑥⑩
面白い	興味深い	①	大丈夫	問題ない， 大変ではない	⑪
すばらしい	優れている	①			

文末表現					
話し言葉	書き言葉	関連書籍番号	話し言葉	書き言葉	関連書籍番号
です, ます	である	①⑤⑦⑩⑪⑫	思う	考える, 考えられる	①③⑪
でしょう (か)	だろう (か)	①	てる	ている	⑤
じゃない (か)	ではない (か)	①⑥⑧⑩	かもしれない	可能性がある	⑤
と言っている	と述べている	①③⑧	～ちゃった	～てしまった	⑩
と書いている	と述べている	①	わかんない	わからない	⑩
その他					
話し言葉	書き言葉	関連書籍番号	話し言葉	書き言葉	関連書籍番号
～と～	および	③	なんてのは	などというのは	⑥
とか	など	②⑥⑦⑩⑪	いっぱい	多い	⑥⑩
ばっかり	ばかり	⑥	こっち	こちら	⑧⑩
てゆう	という	⑨⑩	～れて, ～れる (ら抜き)	～られ, られる	⑨⑩⑪⑬
なんか	など	⑥⑩⑪	いろんな	いろいろな, さまざまな	⑩⑪⑬
やってみて, やってみる	行ってみる, 試す	⑩	あたりまえ	自明, 当然	⑧
みんな	全員	⑩	私的 (わたしの)		⑪⑬
～してて, ～し てる (い抜き)	～しており, ～している	⑩⑬	くらい	ほど	⑪
私 (達)	筆者 (ら)	③⑧	やって, やる	行う	

13冊の関連書籍の中では、接続表現の「～けど」が7冊で取り上げられているのが最も多いが、1冊でしか取り上げられていない話し言葉も多く、表2からも話し言葉とされるものが多種多様であることがわかる。

また、各関連書籍では単に一覧表として示すだけでなく、提示の仕方にもさまざまな工夫がなされている。長尾・村上 (2015) は、文章に混入しやすい話し言葉の例に「耳で聞いた音と合致しない表記」として、「私わ」「思ったとうり」「やむおえず」、新奇な言葉 (用法) や方言として「エグイ」「やばい」「しんどい」などを挙げている (書籍⑨)。また、鍋直・坂東 (2013) は、「タダ→無料、違って→異なり、やばい→大変」を例として挙げている (書籍⑩)。いずれも、やや極端な具体例を提示することで、話し言葉使用に対する意識付けを促していると

言えるだろう。

2.1. 境界線のあいまいな話し言葉

表2は、各関連書籍に出現する話し言葉を基準に取り上げたが、書き言葉への書き換え指示としては境界線のあいまいな部分も多い。関連書籍によって同じ言葉が話し言葉と規定されていれば、書き言葉として規定されているものもある。「～から」「～ので」を例にとると、創価大学学士課程教育機構（2017）では（1）（2）の例を（3）のように「～ため」に置き換えることを指導している（書籍①）。

（1）子どものSNS利用は、犯罪につながる恐れもあるから注意が必要である。

（2）子どものSNS利用は、犯罪につながる恐れもあるので注意が必要である。

（3）子どものSNS利用は、犯罪につながる恐れもあるため注意が必要である。

しかし、石黒（2012:127）では、「論文では避けたい話し言葉の例」一覧表の中で、接続助詞の「から」は書き言葉の「ので」に置き換える例を挙げている（書籍③）。銅直・坂東（2013:15）でも、「理由説明を前にする時は、『から』より『ので』や『ため（ために）』を使うほうが印象が軽くない」（書籍⑩）としており、「～から」は「～ので」への変換でもよいとしている。

また、「いろんな」については、銅直・坂東（2013）はくだけた言葉からととのった言葉一覧表で、「いろんな」は「いろいろな、さまざまな」に変えることを提示している（書籍⑩）。伊藤（2003）は、「ん」音化の説明として、「口語では長い言葉が省略されて短くなったときに『ん』音化すること」（p.111）があるが、レポートでは避けるべきとして以下の例を挙げている（書籍⑬）。

（4）いろんな人が → 色々な人が

これらの例のように、話し言葉や書き言葉には境界線のあいまいなものが存在し、執筆者によりその扱いが異なっていることがわかる。

3. 学生のレポートに見られる話し言葉の調査

「学術文章作法Ⅰ」の授業で課した1年生のレポート中に、関連書籍で扱われる話し言葉一覧（表2）がどの程度出現しているかを調査した。調査対象としたのは、いずれも筆者が担当する2017年度「学術文章作法Ⅰ」の前期中間レポート48本、前期最終レポート46本（ともに同じ学生）、後期中間レポート39本である。中間レポートは、ループリックでの採点とともに、「訂正コード一覧表」（資料）を用いて誤用箇所の下線を引き、2週間以内に学生に返却している。今回の調査に該当するコードは「H1：レポートの表現として不適切」である。学生は、

返却された中間レポートを見直すことで、指摘された箇所を最終レポートで注意することができる。そのため、少なくとも創価大学学士課程教育機構（2017）に採録された話し言葉は、最終レポートでの出現数が減ると予想される。なお、前期中間および最終レポートは、法学部2クラス、理工学部1クラス分で、同じ学生達のレポートである。後期中間レポートは、文学部1クラス、経済学部1クラス分である。

3.1. 「学術文章作法Ⅰ」授業概要

本学の「学術文章作法Ⅰ」は、大学で求められるレポート課題に取り組む際に必要となる基礎技能の育成を目指し、2014年度より初年次全学必修科目として設置された。

本授業の基本構成は、大きく前半と後半に分かれている。前半は、指定した文献を基に、LTD話し合い学習法を用いたグループディスカッションを経て、1500～2000字程度の中間レポートを課している。なお、2017年度前・後期の前半は、宮島喬・鈴木江理子（2017）『外国人労働者受け入れを問う』（第3版）岩波ブックレットを使用した。後半は、学生たちが自ら設定したテーマで、2500～3000字程度の最終レポートを課している。

本授業では、中間および最終レポートを成果物として、それぞれ20点分と35点分で評価している。レポートの構成やパラグラフライティングを始めとし、シラバスには授業到達目標の一つとして、「レポートに適した学術的な文章表現ができる」ことを明記している。授業では、創価大学学士課程教育機構（2017）を用いて話し言葉使用に関する注意を促し、授業内で提示する文章例なども通じて、学生達はレポート作成には学術表現を用いなければならないことは意識付けてできていると言える。また、最終レポートのループリック（資料）では「学術的な表現」の項目を設け、35点満点の2点分ではあるが、評価項目にも加え注意を促している。そのため、調査に用いる学生レポートは、基本的には話し言葉に注意して書かれていることを前提としている。

3.2. 話し言葉の使用実態

表3は、レポートの書き方関連書籍で扱われる話し言葉一覧表（表2）に、学生レポートに出現した話し言葉数を挙げたものである。表中の※は、学士課程教育機構（2017）（文献①）に採録した話し言葉を指す。

表3 学生レポート中の話し言葉使用実態

接続表現							
	前中間	前最終	後中間		前中間	前最終	後中間
でも※	1	0	0	それから	0	1	0
だから※	0	0	1	だって	0	0	0
なので※	2	2	1	じゃあ	0	0	0
なんで	0	0	0	それで	0	0	0
あと※	0	0	0	言いかえると	1	0	0
～から※	11	1	1	付け加えると	0	0	0
～ので※	12	9	6	他では	0	0	0
～して※	5	12	12	はじめは	0	0	0
～しないで※	0	0	0	そして	33	50	29
～のに※	2	5	1	ずっと	0	0	0
～けど※	0	0	0	だけど	0	0	0
～したら※	0	7	2	～し	1	2	0
～ていて※	1	6	3				
副詞表現							
	前中間	前最終	後中間		前中間	前最終	後中間
もっと※	7	3	8	ちっとも	0	0	0
多分、たぶん※	0	0	0	絶対	1	1	0
とても※	8	4	6	超	0	0	0
とっても	0	0	0	どっち	0	0	0
すごく※	0	0	0	あんまり	0	0	0
どんどん※	1	0	0	ちゃんと	0	0	0
だんだん※	1	0	1	正直	0	0	0
ちょっと※	0	0	0	わりと	0	0	0
ほとんど※	3	7	15	いまいち	0	0	0
全然※	0	0	0	やっぱり	0	0	0
はっきり※	0	2	2	だいたい	0	0	0
しっかり※	5	8	5	もっと	8	5	5
きちんと※	1	0	0	なんで	0	0	0
まだまだ※	2	3	5	結構	0	1	0
形容詞的表現							
	前中間	前最終	後中間		前中間	前最終	後中間
いろいろな※	0	1	0	いい※	9	19	13
大切な※	3	16	0	こんな	0	0	0
どんな※	1	1	1	みたい、みたく	0	0	0
たくさんの※	4	7	4	すごい	0	0	0
面白い※	0	0	0	大丈夫	0	0	0
すばらしい※	0	0	0				
文末表現							
	前中間	前最終	後中間		前中間	前最終	後中間
です、ます※	19	23	4	思う※	6	16	3
でしょう (か) ※	0	3	0	てる	2	0	0
じゃない (か) ※	0	1	0	かもしれない	2	4	0

～と言っている※	2	0	0	～ちゃった	0	0	0
～と書いている※	0	0	1	わかんない	0	0	0
その他							
	前中間	前最終	後中間		前中間	前最終	後中間
とか	0	0	0	いっぱい	1	0	0
ばかり	0	0	0	こっち	0	0	0
てゆう	0	0	0	～れて、～れる (ら抜き)	0	0	0
なんか	0	0	0	いろんな	0	0	0
やってみて やってみる	0	0	0	あたりまえ	0	3	1
みんな	0	1	0	私的	0	0	0
～してて、～してる	2	0	0	くらい	0	4	0
私(達)	6	23	13	やって、やる	2	0	1
なんてのは	0	0	0				

4. 調査結果

ここでは、関連書籍で取り上げられた話し言葉が、学生レポート内でどのように出現しているか、実例を挙げながら見ていく。

4.1. 接続表現

接続表現において突出して多く見られたのは「そして」であった。「そして」を話し言葉として取り上げているのは、井下(2014)のみで、書き言葉として「次に」にすべきとしている(書籍⑤)。しかし、実際の文例としては(5)(6)のような、「次に」には置き換えられない例が多い。「次に」に置き換え可能な「そして」のみ話し言葉とみなすべきか検討が必要である。

(5) 例えば楽天, Amazon そしてメルカリなどが挙げられる。

(6) …制度そのものを透明な形式に改善するべきだ。そして「共に生きる」制度の実施, 共生経験に基づく, 外国人労働者への信頼感を築く必要も忘れてはならない。

「から」「ので」は、前期中間レポートではそれぞれ11件と12件見られたが、最終レポートではいずれも1件と9件に減っている。これは、中間レポートでの指摘が、最終レポートに生かされ改善できたことも考えられる。

(7) 将来の存続派が全体の40.1%であるから, その差は4%しかないことになるのである。

(8) 直接友達と会い会話することでSNSに関するいじめも徐々に無くなる

可能性があるのでこれは良い対策ではないだろうか。

4.2. 副詞表現

副詞表現では、「もっと」「とても」「ほとんど」「しっかり」「一番」が他の表現に比べ多く見られる。「ほとんど」「しっかり」「一番」は前期中間レポートより最終レポートの方が出現数が増えていることから、意識しにくい、あるいは中間レポートでは使用せず最終レポートで初出だったことも考えられる。

- (9) これを通して地方の魅力に触れ、もっと興味、関心を持ってもらおうという取り組みである。
- (10) 少子高齢化・労働力不足の現代において外国人の存在はとても大きい。
- (11) 今の日本では、外国人研修生・技能実習生に対する人権はほとんど保障されてない現状といってよい。
- (12) ボランティアの取り組みで外国人が労働者としてしっかりと働ける環境づくりを行っている。
- (13) 保育士が不足する一番の大きな理由としては、過酷な労働時間に対して、安い月給があげられる。

4.3. 形容詞的表現

形容詞的表現では、「大切な」「たくさんの」「いい」が多く見られる。いずれも前期中間レポートより最終レポートで出現数が増えており、副詞表現と同様意識しにくい、あるいは最終レポートで初出であった可能性もある。

- (14) 少しでも地球温暖化を改善するために、小さな対策から始めるということが大切であると考える。
- (15) 子供のいじめは、認知されていないだけで他にもたくさんのいじめがある。
- (16) 米の価格を上げる減反政策は、農協にとって都合のいい政策なのである。

4.4. 文末表現

文末表現では、「です、ます」「思う」が多く、特に前期が中間・最終ともに後期に比べかなり多く出現している。ただ、「です、ます」は、前期中間では19件中11件、最終では23件中11件がそれぞれ1名の学生レポートに出現していた。その他の出現傾向の多くは、(17)のように引用文中に見られるものであった。また「思う」も、前期最終の16件中11件は1名の学生レポートに出現していた。

- (17) 財務省 (2017) は「消費税は毎年 10 兆円程度の税収が続いており、税収が経済動向に左右されにくく安定した税と言えます」と述べている。

4.5. その他

その他では、「私 (達)」が多く見られる。石黒 (2012) および石井 (2011) では、「私 (達)」は「筆者 (ら)」に変えるべきだとしている。(18) は「筆者」に置き換え可能な例であるが、(19) は「筆者ら」に置き換えられるものではない。「筆者 (ら)」に置き換え可能な「私 (達)」のみ話し言葉とみなすべきか検討が必要である。

- (18) 私は、死刑は廃止すべきだと考える。

- (19) 保健所に犬猫が連れていかれるのは私たち人間の無知と無責任さによるものである。

5. 考察

今回、「学術文章作法 I」で提出された学生レポートから関連書籍で取り上げられている話し言葉の抽出を行ったが、明らかな傾向性と呼べるものが見えたわけではない。その理由として、本授業自体がレポートの書き方を指導する科目であり、授業内で話し言葉に関する注意を促し、提示する例文や見本等からもある程度は話し言葉と書き言葉の区別が身についていたからと考えられる。また、今回は関連書籍で取り上げられた話し言葉に限定して調査を行ったため、それ以外の話し言葉が抽出できていないことも挙げられる。

関連書籍によっては、文章中に現れやすい話し言葉というより、「じゃあ」「超」「～ちゃった」「わかんない」など口語としての話し言葉も取り上げられていたが、それらの出現は、本授業のレポートには見られなかった。ただ、全レポートを通してもっとも出現数の多かった「そして」については、それを話し言葉であると断言し、対応する書き言葉を明確に示しにくいことから、学生達は書き言葉であるという認識で使用しているものと思われる。

6. 今後の課題

今回の調査では、話し言葉の出現数のみを抽出したが、文末表現の「です、ます」「思う」のように一見出現数の多い言葉でも、実際は一人の学生のレポート中にその多くが出現している例もあった。単なる出現数だけでなく、個人のレポート内の出現率についても今後は確認していきたい。

また、今回の調査を通し、関連書籍で取り上げられた話し言葉とされるものが一般的にも話し言葉と断定できるか、文中での使われ方によっては話し言葉とは認められない場合もあるのではないかという新たな課題も見つかった。例を挙げると、学士課程教育機構（2017）で話し言葉としている「ほとんど」がある。書き言葉として「ほぼ」に変えるべきとしているが、（20）の「ほとんど」が話し言葉であるかは判断が分かれる可能性もある。

（20）今の日本では、外国人研修生・技能実習生に対する人権はほとんど保障されてない現状といってよい。

「～と～」 「言いかえると」 「くらい」 等についても同様に、使われ方によっては判断が分かれる可能性もあり得る。

そこで、今後の課題として、レポートの書き方指導の授業で書かせたレポートだけでなく、専門科目等授業内で特別にレポート指導を実施せず課した文章からの話し言葉抽出を試みたい。また、話し言葉の判断基準を明確にしていくためにも、レポートの書き方等文章指導を担当する教員とそれ以外の専門科目を担当する教員にも協力を要請し、話し言葉判断の調査も行っていきたい。

注

- 1) 表2中の「～して」は「って、んで、いて、いで、きて（来て）」を含む。「しないで」は「なくて」を含む。「言いかえると」は「言い換えると、いいかえると」を含む。「付け加えと」は「付けくわえと、つけくわえと」を含む。「はじめは」は「初めは、始めに」を含む。

参考文献

- 秋岡伸彦（2007）『文章表現テキスト』東京農業大学出版会
石井一成（2011）『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社
石黒圭（2011）「話し言葉と書き言葉—初年次教育の基礎資料として」『言語文化』第48号 15-35
——（2012）『この1冊できちんと書ける！ 論文・レポートの基本』日本実業出版社
石坂春秋（2003）『レポート・論文・プレゼン スキルズ』くろしお出版
伊藤義之（2003）『はじめてのレポート レポート作成のための55のステップ』嵯峨野書院
井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法〔第2版〕』慶應義塾大学出版会
上戸理恵・遠藤郁子・神田由美子・羽矢みずき・藤田和美・与那覇恵子（2016）『新編 マスター日本語表現』暁印書館
大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂（2014）『ピアで学ぶ大学生の日本語表現〔第2版〕』ひつじ書房

- 菊田千春・北林利治（2006）『大学生のための論理的に書き，プレゼンする技術』東洋経済新報社
- 佐藤達全（2002）「保育科学生の文章表現力について」『育英短期大学研究紀要』第19号 69-80
- 佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄編著（2015）『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド』大修館書店
- 創価大学学士課程教育機構（2017）『レポート作成の手引き 2017年度版』
- 銅直信子・坂東実子（2013）『大学生のための文章表現&口頭発表練習帳』図書刊行会
- 長尾佳代子・村上昌孝（2015）『大学1年生のための日本語技法』ナカニシヤ出版
- 森下稔・久保田英助・鴨川明子編（2010）『新版 理工系学生のための日本語表現法』東信堂
- 山路奈保子・因京子・藤木裕行（2013）「日本人大学生の書き言葉習得—初年次と3年次における調査結果の比較から—」『専門日本語教育研究』15巻 47-52

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP26370617, 17H01841 の助成を受けたものです。

（やました・ゆみこ，創価大学学士課程教育機構講師）

資料

訂正コード一覧表

	コード	意味	詳細
体裁		体裁上の不備	レポートの体裁が整っていません。 例：表紙がついていない、必要な情報が書かれていない
構成		三部構成になっていない	序論・本論・結論の三部構成にしましょう。
		必要な要素の不足	レポートの構成に必要な要素が抜けています。 例：問題提起がない ※詳しくは「レポートの構成」を参照してください。
		一貫性の欠如	序論・本論・結論に一貫性をもたせましょう。
段落 (D)	D1	段落が長い	一段落が長いです。長すぎると読みにくくなるので、要約しましょう。
	D2	段落が短い	一段落が短いです。もう少しその話題について説明しましょう。
	D3	話題が不明確	何について書かれてあるのか話題が不明確です。段落の初めの一文に、その段落の話題や最も言いたいことを書く相手に伝わりやすくなります。
	D4	一つの段落に二つ以上の話題がある	一つの段落に一つの話題を入れるようにしましょう。いくつかが話題がある場合は段落を分けましょう。
	D5	話題と説明に整合性がない	その段落の話題とそれに対する説明が一致していません。適切な説明を書きましょう。
	D6	段落の終わりにまとめの文がない	まとめの文がありません。あるいは、まとめの文と段落の内容が一致していません。1 段落の最後に、その段落の内容をまとめた一文を書きましょう。
内容 (N)	N1	説明を補う	話題を説明しきれていません。読み手に配慮して必要な説明・解説を十分にしましょう。
	N2	簡潔に説明する	内容を簡略化することで相手に内容が伝えやすくなります。名詞化などを利用して要約し、また無駄な文章を削っていくようにしましょう。
	N3	根拠不明示／不適切	根拠がない、あるいはふさわしくありません。自分の考えや経験などの主観的なものは、根拠になりません。客観的なデータや先行研究など妥当な根拠を探し出し、明示して下さい。
	N4	論理の飛躍	前までの文章では、この内容・結論につなげることはできません。途中経過を書く必要があります。
文章 (B)	B1	一文が長い	書き出しと終わりで伝えたい内容が変わりやすくなり、ねじれが起こりやすくなります。一文一意の原則、複文、重文を念頭に置き、文章をわけましょう。
	B2	不自然な文／読みにくい文	文法に問題があり、不自然な文章になっています。もしくは、文法的には問題はありませんが、読みにくい文章になっています。主語と述語や助詞を確認しましょう。あるいは、語順や重複している言葉がないか確認しましょう。
	B3	体言止め	名詞・名詞句で文章を終える体言止めはレポートでは用いません。

表現 (H)	H1	レポートの表現として不適切	レポートの表現としてふさわしくありません。学術的な表現に直しましょう。※詳しくは「学術的な文章に適した表現」を参照して下さい。
	H2	言葉の使い方が不適切	日本語として言葉の使い方が不適切です。辞書を用いて適切な言葉を用いましょう。
文字・ 表記 (M)	M1	段落の初めを一字あける	段落の最初の文の書き出しは、必ず1字（全角）あけて下さい。
	M2	読点「、」なし	読点が少なく、とても読みにくいです。文章の意味をよく考えて、読点「、」を打ちましょう。
	M3	誤字・脱字	誤字・脱字がないように、レポートを読み返す習慣をつけましょう。
	M4	英数字は半角に	英数字は全角ではなく、半角にしましょう。
	M5	表記を統一する	表記を統一させましょう。例)「第一の注目点は、第2の注目点は、」「～が挙げられている。～があげられている。」
	M6	略語を使わない	初出の単語は、必ず正式名称で書きましょう。その後は略語で書きましょう。例:日本経済団体連合会（以下、経団連）は…。
引用 (I)	I1	引用形式誤記	本文中の引用の形式が守られていません。
	I2	参考文献リスト不明記/誤記(末尾)	参考文献リストがありません。あるいは、リストの書き方が間違っています。※詳しくは「参考文献リストの書き方」を参照してください。
	I3	誰の意見か不明確	自分の考えなのか、他者の考えなのかを明確に区別しましょう。

